

4. 個人研究第2種実施報告

中世低地地方南部における都市・農村共同体と 他所者 (extraneus)

Les étrangers et les communautés rurales et
urbaines dans les Pays-Bas méridionaux

斎藤 綱子

SAITO Keiko

1. 問題の所在

西欧中世の都市・農村の史料には、共同体を構成するブルジョアと非ブルジョアが区別されている。12世紀エノー伯領の慣習法文書を分析したJ. NazetやM.-A. Arnouldは文書の内容の享受者をブルジョア、外来者、聖人衆に、また、J. Gillissenは中世後期の都市に関わる人々をブルジョア、外来者、市外市民(bourgoies forains)、単なる居住者に区分している。しかし、このような区分はそれぞれのグループを峻別するものではない。ブルジョアが聖人衆という身分でさらに権利や義務を付加されているし、市外市民は身分としてはブルジョア身分を享受している。

本研究では市外市民を取り上げて、共同体との関係を考察した。市外市民とは都市の外に居住しながら市民権を享受している人々であるが、後述するように、一定期間都市に滞在することを義務づけられ、軍役を負っている。市民にして外来者といういわば逆説的性格をもつと言える。

市外市民に関しては低地地方やドイツに関して多くの研究がなされているが、14世紀以降現れる市民登録簿を主要な史料としており、実際に多くの都市で15/16世紀においてその数は増加しており、中世後期・近世に関しての分析に焦点があてられてきた。さらに、市外市民の性格についても、既存の市民の権限と比較されてはいるものの、両者の関係、史料上区分された人々が日常の共同体的生活でどのような繋がりをもっていたのかについてはほとんど触れられていない。

本論ではエノー伯領における市外市民、特に建設都市アット(Ath)のそれを事例として、彼らと共同体

の構成員である真の市民との関係をさぐることにした。その場合、共同体が領主権力と対峙したとされる12世紀から14世紀半ばまでを対象とした。

2. エノー伯領における市外市民の出現

エノー伯領における市外市民の史料上の初出は、ジスルベール・ド・モンスの『エノー年代記』に言及されている1195年の伯ボードワン五世の禁止令であり、その後も伯によって禁止令が出されている。1288-89年には伯ジャン・ダヴェーヌはマロワール修道院への文書の中で、同修道院の所領民は、望む村に居住するのでなければエノーではブルジョアになれないとしている。以後14-15世紀を通して禁止令は出され続けるが、他方で市外市民の流入が途絶えたわけではない。これらの市外市民は伯の都市であるアット、ブシャン、バヴェ、ル・ケノワに集中しており、市外市民制度は、伯が都市を中心として一円的支配を推し進めようとしたものであり、市外市民は「伯の市外市民」という性格をもつことがこれまでの研究者によって指摘されてきた。そして、伯がこの制度の廃止を打ち出した背景には、都市の支配が周辺農村に波及することへの在地領主層の反発があったことが強調されている。

3. アットにおける共同体と市外市民

12世紀半ば以降にまで遡及させた場合、14世紀の写本が残存するアットの慣習法文書はこの時期に遡及すると思われる。さらに、13世紀についてはエノー伯の所領明細帳(Cartulaire de rentes et cens)、14世紀については伯の命令の下での調査書(apprise)、市民登録簿が残存するが、これらは実際にはそれ以前に遡及するものと思われる。

まず、本来の市民(bourgeois masurier)の主要な特権としてあげられるのが、人頭税の固定化、マンモルト・バナリテの廃止、流通税の免除である。他方、市外市民に関して強調されているのは、アットの裁判に所属することでの人身・財産の保障と、義務としての軍役の負担である。

これらの移住者の出自については、伯の所領明細帳に記されてくる姓をたどると決して遠方からではない。少なくとも13世紀頃までは、これまで、エノー地方の他の都市・村落でみたと同様、遠地からではなく、日常的に接触のある地域の住民が市外市民となっ

ているとみられる。

先に筆者はエノー伯領の都市への移住者が、近隣の農村出身者であり、おそらくその都市と日常的に接触をもっており、生活を大きく変える必要のない範囲での移動であったことを指摘した。12/13 世紀における市外市民についても、全く未知の外来者ではなく、近隣に居住し、日常生活の場で接点をもつ人々が主流であったと結論できよう。